

みんぱく創設 50 周年記念特別展
「民具のミカタ博覧会—見つけて、みつめて、知恵の素」
関連シンポジウム「コレクションの系譜学」

要 旨 集

日時 2025 年 3 月 30 日（日）

会場 国立民族学博物館 第 5 セミナー室

参加形態：会場・オンライン（ハイブリッド形式）

※会場参加：一般参加者事前予約先着 50 名

※オンライン配信：一般参加者事前予約先着 450 名

主催 国立民族学博物館

共催 日本民具学会、国立歴史民俗博物館「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」

開催趣旨

民具は、日常生活で必要なものとしてつくられ、使われてきた暮らしの造形であり、身近な素材を活かす知識や技、人びとが育んできた自然観や世界観にふれることができる。また、民具は、研究者が旅をし、さまざまな地域の生活文化と出会いながら収集され、博物館のコレクションへと発展する。

本特別展では、1970年大阪万国博覧会（EXPO'70）のために世界各国で収集された世界の民具と、その同時代に日本文化の多様性に目を向けて、全国規模で収集された武蔵野美術大学所蔵の日本の民具から、選りすぐりの民具を紹介する。数多くの切り口から、世界と日本の民具の魅力を「見つけて」、ひとつひとつ「みつめて」、そこに「知恵の素」を探っていく。

本シンポジウムは、上記特別展の関連シンポジウムとして開催する。EXPO'70を象徴する「太陽の塔」の地下には、人類の原点として、世界の民族資料約2,500点が展示された。これらの民族資料を収集したのが、「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」（EXPO'70 Ethnological Mission）、通称「EEM」である。そして、これらの資料は、EXPO'70が閉幕すると、国立民族学博物館に寄託（その後寄贈）され、基幹コレクションのひとつとなった。また、武蔵野美術大学では、宮本常一が中心となった武蔵野美術大学生生活文化研究会による収集がおこなわれ、さらに近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所が「民族文化博物館」の設立を目指して収集した民具が、武蔵野美術大学民俗資料室に寄贈され、ムサビ・コレクションともいえるコレクションが形成された。なお、国立民族学博物館、武蔵野美術大学民俗資料室は、いずれも民具学を提唱した渋沢敬三が主催した「アチックミュージアム」の系譜を引き継ぐものであり、国立民族学博物館には、アチックミュージアムの収集資料が、基幹コレクションの一つとして移管されている。

こうした民具のコレクションが形成されるなかで、新たな動向として、奥能登国際芸術祭の活動の一環として、「大蔵ざらえプロジェクト」が展開している。本プロジェクトは、能登半島の先端に位置し、豊かな里山里海に囲まれた珠洲市において、各家の蔵に代々残されてきた民具をはじめとした、「地域の宝」を収集、整理するものである。そして、収集した民具を専門家が調査し、アーティストが作品へと活用することで、モノを主役とした劇場型民俗ミュージアム「スズ・シアター・ミュージアム」と収蔵展示を採用したその「分館」において展示され、地域に眠っていた民具の再価値化を図ることに成功した。

本シンポジウムでは、こうした民具の巨大コレクション形成の活動を概観する。そして、コレクションの発展的な活用等について議論を深める。

プログラム

総合司会 橋本沙知（国立民族学博物館）

13：20～13：25 開会あいさつおよび趣旨説明
日高真吾（国立民族学博物館）

13：25～13：55 EEM コレクションからみんぱくへ
日高真吾（国立民族学博物館）

13：55～14：25 「アチック・レガシー」とムサビ・コレクション
加藤幸治（武蔵野美術大学）

14：25～14：55 文化資源の再共創—奥能登国際芸術祭の大蔵ざらえの試みとその背景
川村清志（国立歴史民俗博物館）

14：55～15：10 休憩

15：10～15：20 コメント 西まどか（編集者）

15：20～16：20 パネルディスカッション「コレクションの系譜学」
コーディネーター 神野善治（日本民具学会長・武蔵野美術大学名誉教授）
パネラー 日高真吾、加藤幸治、川村清志

16：20～16：25 閉会挨拶
神野善治（日本民具学会長・武蔵野美術大学名誉教授）

EEM コレクションからみんぱくへ

日高真吾（国立民族学博物館）

1970年の日本万国博覧会（EXPO'70）のテーマ館である「太陽の塔」。その地下には、人類の原点として、世界の民族資料約2,500点が展示された。

これらの民族資料の収集を担ったのが、「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団（EXPO'70 Ethnological Mission）」（EXPO'70 Ethnological Mission）、通称「EEM」である。そして、EXPO'70が閉幕すると、これらの資料は1974年に創設される国立民族学博物館に寄託（その後、寄贈）され、基幹コレクションのひとつとなった。

EEMについて大きな役割を果たした人物として、まず、岡本太郎に触れておかなければならないだろう。岡本は、いわずもがな、EXPO'70のシンボルゾーンのプロデューサーを務め、「太陽の塔」をデザインした人物である。岡本は、「太陽の塔」の空間を「地下」、「地上」、「空中」の3つで構成し、「過去」、「現在」、「未来」の世界を表現しようとした。そして、地下空間を「過去・根源の世界」と位置づけ、そこに世界各地の民族資料を展示することを構想した。また、これらの民族資料は、「根源の呼び声と対話できるように、むき出しに展示したい。」と考へ、博物館等などからの借用することをはじめから断念していた。そこで民族資料の新規収集をおこなうため、EEMが結成されたのである。

EEMをけん引したのは、東京大学の泉靖一と京都大学の梅棹忠夫の2人の人類学者である。EEMを統括する立場にあった梅棹は、その後、EEMの活動の記録を取とりまとめ、『日本万国博覧会世界民族資料調査収集団（1968—1969）記録』として刊行した。このなかには、国立民族学博物館の設立に関する興味深い記述をみることができる。それは、EEMの収集において、関係者の間では、「将来、どこかに国立の民族学博物館が設立されたあかつきには、これらの収集物はそこに移管され、収蔵、展示される」という、共通の了解事項が成立していたというものである。一方、梅棹はこの件について、「実際のところ、当時は、民族学博物館設置のことは、要望、ないしは運動として存在するのみで、実現のきざしすら、何一つあらわれていなかった」と述懐している。このことから、当時の梅棹自身は、国立民族学博物館の設立を強く願ってはいるものの、実際の設立については、まだ、具体的なイメージを持っていなかったことがうかがえる。ところが、国立民族学博物館は、EXPO'70終了後、1974年に創設され、1977年に開館した。こうして振り返ると、EEM、EXPO'70は、まさに国立民族学博物館誕生に直接的な役割を担っていたことを知ることができる。

「アチック・レガシー」とムサビ・コレクション

加藤幸治（武蔵野美術大学）

全国の地域博物館には、民俗資料としての民具が数知れず保存されている。一方、そうした地域コレクションとは異なる過程で形成された、大学や研究所が所蔵する民具コレクションがある。その代表的なものが、国立民族学博物館（以下、みんぱく）所蔵の日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）コレクションである。これは戦前の渋沢敬三が主宰したアチック・ミュージアム（以下、アチック）が、民具の枠組みを「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」（『民具蒐集調査要目』1936年）と表明し、標本資料収集への協力を全国的に呼びかけて集積された。東京郊外の保谷（現：西東京市）に建設された、国内初の民族学博物館のコレクションへと発展し、のちにみんぱく創設時からの基幹コレクションとなった。

大学が所蔵する国内最大規模の民具コレクションは、武蔵野美術大学（以下、ムサビ）の約9万点のムサビ・コレクションである。収集を率いたのは民俗学者・宮本常一名誉教授（在職：1964年～1977年）であり、当時の学生や若者たちとともに活動した武蔵野美術大学生活文化研究会（1966年発足）と近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所（1966～1989年、以下、観文研）によって収集された。観文研は1975年に民族文化博物館を開設することを念頭に民具収集を行なったが、オイルショックなどの要因から博物館構想は頓挫し、武蔵野美術大学にもたらされた。

晩年の宮本常一は「自由」で「生きのいい」若者を育てたいと意気込んでいたが、その時に着目したのが戦前に宮本常一も同人として活動したアチックが重視した民具と、庶民の生活文化を探求するための旅であった。ものをよく観察する眼を持ち、それを作品やデザインによってみずからの手で表現できる美大生の学びの軸として、民具とフィールドワークに新たな意義を見出したのである。

ムサビ・コレクションには、アチックのレガシー（遺産）が引き継がれている。それはフィールドワークと経験を重視するアクティヴな調査、それをシェアして互いに研鑽する討論の場、成果を社会に向けてアウトプットする展示や雑誌といった表現方法に見出せるが、真の意味での「アチック・レガシー」は若者たちがエネルギーに推進し、上の世代が顧問役としてそれを後押ししつつ、主宰する者は適度にそして必要な言葉をかけていくという、チームビルディングにこそある。緩やかな組織が、活動を成長させ、集う人々の個性が発揮させていくという、渋沢敬三がアチックに求めたハーモニアス・ディベロップメントの哲学を、宮本常一はムサビ・コレクションにおいて実践したのであった。

ムサビ・コレクションは生活文化の研究資料としてはもちろん、美術・デザインの表現のヒントとなる「知恵の素」の源泉として、現在も活用され続けている。最近の実践例も紹介しつつ、民具コレクションの現代的な意義について考えてみたい。

文化資源の再共創—奥能登国際芸術祭の大蔵ざらえの試みとその背景

川村 清志（国立歴史民俗博物館）

本発表では、石川県珠洲市で開催された奥能登国際芸術祭の「大蔵ざらえ」とその成果である、スズ・シアター・ミュージアムを紹介する。「大蔵ざらえ」は、珠洲市内の家々に保管され、顧みられなくなった生活用具の寄贈を募り、それらを芸術祭に参加するアーティストたちが作品に昇華しようとする試みである。2021年には、市内の大谷地区にある旧西部小学校の体育館が「スズ・シアター・ミュージアム」へと改修され、8組のアーティストが各々のテーマに沿って、地元の文化資源を用いた作品を紹介している。

このプロジェクトは、21世紀以後、顕著となったアートプロジェクトによる地域文化の再捕捉の一環と捉えられる。しかし、そこに至る歴史的経緯として、民具などの物質文化への眼差しの所在と、それらの保存・活用のために制定された文化財保護制度や日本各地に開設された博物館・資料館の存在を視野に入れる必要がある。これらの営みの果てに現在のスズ・シアター・ミュージアムを捉え直すことで、本シンポジウム、並びにこの特別展がテーマとする文化資源の歴史的な意味について、より複眼的な視点からアプローチできると考える。

民具や生活用具への眼差しは、渋沢敬三によるアチック・ミュージアムの創設と、その後の物質文化研究の進捗によるところが大きい。戦後の文化財保護法の有形民俗文化財のカテゴリーも、アチック・ミュージアムによる分類が大きな影響を与えている。このような眼差しが地域社会にも共有され、地元の文化資源を価値づける動きが盛んとなる。興味深いことに1960年代初頭から文化資源は、資料の保護と観光資源への活用への視点が併存していた。1959（昭和34）年に岐阜県の飛騨高山に開設された「飛騨民俗村」や、1961（昭和36）年、青森県三沢市の旅館の一角に設置された「小川原湖民俗博物館」などがそれにあたる。大蔵ざらえの舞台となる珠洲市でも、1967（昭和42）年に能登記念館「喜兵衛どん」が開設され、地域の歴史を物語る製塩具と漆器関連用具が展示されていた。

しかし、文化資源を取り巻く環境は1990年代以降、急速に悪化していく。博物館や資料館は休館、閉館に至る所も多く、所蔵されていた文化財の保存も危ういものとなっている。珠洲市では2002年に「喜兵衛どん」が閉館してから、製塩具や漆器用具は国の重要有形民俗文化財に指定されているにもかかわらず、活用しようとする動きは見られない。経済的限界や制度疲労のなかで行われた「大蔵ざらえ」の試みは、アーティストや地域内外のボランティアを巻き込み、文化財行政や研究者の視点に囚われない市民による文化共創の可能性を指し示している。これらの活動領域を展開することで、行き詰まりを見せる文化財の保存・活用の可能性について報告する。

M E M O